

『翻訳理論の探求』

アンソニー・ピム著

武田珂代子訳

みすず書房より 2010 年 2 月刊行予定

訳者あとがき(抜粋)

『翻訳理論の探求』はアンソニー・ピム(Anthony Pym)著“Exploring Translation Theories”の日本語訳である。ピムはオーストラリア、パース出身。オーストラリアで比較文学を学んだ後、フランスに留学し、フランス国立高等社会学研究院より社会学で博士号を取得した。ハーバード大学、ゲッティンゲン大学などでも哲学、社会学、翻訳学を研究し、現在、スペイン、タラゴナのロビラ・イ・ビルジリ大学教授、翻通訳・異文化間研究博士課程プログラムの責任者として、また、モンレー国際大学翻通訳大学院の客員教授として、翻訳理論・研究・実践の指導にあっている。世界中で講演や講義を行い、研究者育成に精力的に取り組むピムは、カリスマ性と面倒見のよさで、新進の翻訳研究者にとってロックスター的存在と言ってもよいだろう。

ピムは、これまで英語およびフランス語で 200 以上の著書、編纂書、論文を発表してきており、翻訳理論・研究の分野で最も引用される学者の一人である。翻訳学における根源的テーマに対し鋭い問題提起をし続け、論文、書評、学会発表を通して、困難な課題に真っ向から挑戦し、「聖域」なき議論の口火を切ることもし少ない。本文中で、翻訳学の発展における最大の貢献者の一人、ギデオントゥーリーを「反逆児」扱い(もちろん、尊敬と愛情を込めて)しているが、アンソニー・ピムは現在の翻訳学における「反逆児」だと訳者は見ている(もちろん、尊敬と愛情を込めて)。本書を通して、翻訳学の発展にかけるピムの情熱、また、彼の健全な学問的批判精神を読者に感じていただければと思う。

ピムはまた、翻訳学の最先端を走り、社会学的アプローチや翻訳とテクノロジーの関係など、翻訳学の新境地を切り開いてきた。「あとがき」でも触れているが、現在、ピムは「リスク管理」の概念を適用して、さまざまな翻記事象を説明することに取り組んでいる。最近の講演によると、特に、機械翻訳とデータベースを利用する Google Translate やファン翻訳者がインターネット上で協働翻訳する「ファン翻訳」が翻訳実践に及ぼす影響、また、脱構築派が主張する「意味の不確定性」やポストコロニアルの枠組みでの「翻訳不在の翻訳論」への対応などを、翻訳学がこれから取り組むべき課題と見ている

ようだ。また、翻訳は異文化間コミュニケーションの一つとして捉えるべきで、その中で翻訳特有の事象は何かを研究すべきとも主張している。さらに、翻訳学の研究成果が限られたコミュニティ内のみでしか認識されてないことを問題視し、自分も「翻訳学村」から「グローバル村」に飛び出すべきだと語っている。今回の『翻訳理論の探求』の刊行によって、ピムの業績の一部が日本の読者に届き、彼の「グローバル村」入りの扉がひとつ開くことを願っている。

本書はピムが2003年以来、自身の翻訳理論講義の中で用いてきた「私家版教科書」が発展したものである。訳者はピムの指導を受ける博士課程の学生として、その原初版を勉強した経験がある。当時は、「等価」の下位パラダイムについての記述はなく、ピム自身も「自然的」と「方向的」の概念を模索しているようだった。学生とのディスカッションを通して、その定義が明確化していったことを覚えている。「不確定性」や「ローカリゼーション」はすでに含まれていたが、「文化翻訳」についての議論は一切なかった。ピムが「文化翻訳」に触れ出したのは2008年くらいからだ。米国の比較文学者が流行語のように「翻訳」という言葉を盛んに使い出し、ウィキペディアでの「翻訳学」の説明がまさに「文化翻訳」になってしまったとき、ピムにとってそれは「注意を向ける価値のないもの」でなくなったのだろう。また、原書の出版社であるラウトレッジ社が「文化翻訳」関係の出版物を推進している背景もあり、同社の希望で「文化翻訳」の章が急遽含まれた経緯がある。この「翻訳不在の翻訳論」に対するピムの見解については本文を読めば明らかなので、訳者による解説は無用だ。

日本における翻訳の歴史は古く、非常に豊かな翻訳文化が存在してきたが、翻訳についての議論は、「どう翻訳すべきか」という規定的翻訳論や、翻訳批評、翻訳が日本語と日本文化に与えた影響、また翻訳史一般が中心だったと言える。しかし、近年、西洋における翻訳学の進展を意識しながら、日本語関連の翻訳事象のさまざまな側面について実証的研究をする傾向が見られ、それは、学会、学術誌、書籍刊行における最近の動きにも反映されている。2007年には翻訳研究に特化した学術誌である『翻訳研究への招待』が創刊され、また、日本通訳学会は翻訳研究に携わる会員が増えたことから、2008年、日本通訳翻訳学会に改名された。さらに、2009年には翻訳研究における最良の基本文献である“Introducing Translation Studies”の日本語訳が『翻訳学入門』（ジェレミー・マンディー著、鳥飼玖美子監訳、みすず書房）として刊行された。翻訳に取り組んだのは、日本における翻訳通訳研究をリードする立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の教員および学

生チームである。これによって、翻訳学の国際コミュニティで用いられる数々のメタ言語の日本語訳が誕生した。

本書は、「まえがき」にもあるように、上級の学生・研究者を対象にしたもので、研究や応用ではなく、理論だけに焦点を当て深掘りしたものである。百科事典的な情報の提供ではなく、各理論の系譜やつながり、パラダイム間の相違点、また、各パラダイムに対する批判およびその弁護が明確に提示されている。『翻訳学入門』は、翻訳学の全体像を知り、どこからどう研究を始めたらいいかの指針となる優れた入門書だが、『翻訳理論の探求』は「翻訳とは何か」という根源的な議論の起爆剤になる原点的理論書だと訳者は考える。読者の中には、西洋の翻訳理論に基づいた本書の議論が日本語のコンテキストでも適用できるのかと疑問を呈する向きもあるかもしれない。確かに、「等価」の議論は主にヨーロッパ言語に関して展開されたので、概念（例えば単語数の比較など）や用語（特に言語学に基づくもの）で、日本語のコンテキストではそれほど関連性がないものもある。しかし、「目的」、「記述」、「不確定性」、「ローカリゼーション」はどの言語の状況においても適用できる概念だろう。「文化翻訳」については、訳者の知る限りでは、日本において「翻訳」という言葉がテキストや言語を離れたコンテキストで盛んに使われている状況はないようだ。いずれにしても、各章末にある課題の提案については、日本語のコンテキストに合わせて何らかの調整をしたり、日本の読者向けに新たな課題を考えるのも、本書の興味深い活用法になることだろう。

本書の冒頭に、翻訳者は翻訳作業中、常に理論を構築しているとの記述がある。候補訳の生成と選択を自分なりの論理や根拠でもって瞬間的に実行していることを、翻訳者による「理論づけ」と捉えているのだ。そうした視点を貫く本書の翻訳にあたり、訳者も自らの意思決定の根拠、論理、正当化を翻訳作業中に意識せざるをえなかった。まず、意味の不確定性に対する対処法として、本書は「対話とコンセンサス」や「社会的構成主義」などを唱えているが、それはまさに訳者が実行したことだった。対話の相手になったのは主に本書の著者ピム自身だったが、他の翻訳者、翻訳研究者、学生などとの意見交換をもとに翻訳の意思決定をすることも少なくなかった。

学生・研究者としての文献の読み方と、翻訳者としてのそれとは異なる。学生・研究者は自分にとって不必要と思われる部分を読み流したり、概念や要点、論理の流れが把握できればそれでよする読み方をすることもあるだろう。しかし、翻訳者はテキスト内のあらゆる言葉に細心の注意を払う。訳者は本書の幾多のバージョンをこの数年間読んできたが、今回の翻訳作業を通して、自分の理解が甘

かったところ、細かいニュアンス、巧みな隠喩的表現などを新たに発見することが多かった。ピムにはありとあらゆる質問を投げかけたが、いつも我慢強く丁寧に答えてくれた。ピム自身も訳者とのやり取りを基に、誤解を与えかねない箇所などに手を加えながら最終稿が完成した経緯がある。(翻訳作業は原書第一稿から始まっていた。)ちなみに、訳稿提出前の数週間における著者と訳者の対話はインターネット上で公開されている

(<http://www.facebook.com/group.php?gid=134297190937&ref=ts#/pages/Exploring-Translation-Theories/119344071727?v=wall&ref=share>)。

原文中の不明点は、主に著者との確認作業を通して解決されたわけだが、訳語に関しては、他の翻訳者、日本の翻訳研究者に意見を求めたり、類似書の日本語訳、学生による翻訳を参考にしたりした。特に、立教チームによる『翻訳学入門』のおかげで、基本用語の訳でそれほど苦しみことなく、立教訳を踏襲できたのは非常に有難いことだった。立教チームの訳を採用しなかった用語としては、‘adaptation’ や ‘professional norms’ などがある。‘adaptation’ は立教訳では「翻案」だった。「等価」の文脈では「翻案」でよいかもしれないが、本書ではローカリゼーションや翻訳の普遍的特性の文脈で ‘adaptation’ という言葉が何度も登場し、文脈上、「翻案」(小説や戯曲の改作を思い起こさせる)ではなく、「適合」という言葉を用いることにした。また、‘professional norm’ の訳として「プロフェッショナル規範」ではなく、カタカナの多用を避けるために同じ意味を表現できると訳者が考える「職業規範」を用いることにした。

また、本書の2章から5章まで及び7章は他の翻訳者による翻訳を下敷きにした。本書の草稿の第2章と第3章は当時モントレイ国際大学翻訳通訳大学院の学生だった村永由貴子、第4章と第5章は岡田知恵の両氏がそれぞれ卒業論文の翻訳プロジェクトとして訳したものがあり、それらを基に訳者が最終版の翻訳に取り組んだ。また、第7章は立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科でローカリゼーションに関する博士論文を執筆中の山田優氏による翻訳を下訳として使わせていただいた。ただし、これらの章も含めて本書の翻訳に関する最終的な責任は訳者の武田珂代子にある。

地名、人名の日本語表記については、基本的には『翻訳学入門』にならったが、Vermeer は立教版の「フェルメール」ではなく「フェアメーア」、Hermans は「ハーマンズ」ではなく「ヘルマンズ」とした。これは、原発音に最も近い日本語表記をピム自身が希望したからだ。ピムからの助言や要望は他にもあった。例えば、脚注として訳注を加えることは最小限にするようにとの要望があった。ピムは論文等で脚

注を使用することを良しとしない。すべて本文中で説明できるはずだ、という考えらしい。実際、本書の原文には脚注が一つもない。誤植や何らかのエラーがあっても、訂正を日本語訳に反映し、エラーがあったことを脚注などで知らせる必要はないとの要請もあった。原書のエラー情報(例えば、第8章の節の番号など)はインターネット上にあるので、原書と訳書を比較したい読者はそれを参照することもできるだろう(<http://www.tinet.cat/~apym/publications/ETT/index.html>)。引用文に関しては、既存の訳がある場合、それを参考にはしたが、題名や章名以外は、基本的にはすべて訳者が原文中の英語を基に訳した。これは、「既存の訳文をそのまま引用しなければならない理由はない」というピムコメントを基に、訳者が判断したことだった。

また、訳者が翻訳作業で悩み苦しんでいると、ピムは「リスク管理」の話(「あとがき」にもある)をしてくれることがあった。意思決定の対象が、ニュアンスも含めて伝えなければならない重要なもので、絶対に漏れがあってはならず、細心の注意を持って訳すべき「高リスク」情報なのか、それとも、ポイントさえ伝わればよく、一語一句に拘泥する必要のない「低リスク」情報なのか、それを見極めて、時間と労力の配分をせよという考え方だ。締め切りが迫っていた時期には、この助言がたいへん参考になった。さらに、ピムは、訳者の質問に答えるたびに、「翻訳しにくいところ、日本の読者に関係ないような箇所は省略するというのも正当な翻訳方略だ」と付け足すのが常だった。しかし、こればかりは師の教えに逆らい、苦しみながらも何とか訳出できるよう最後まで粘った。